自鳥
画獣

鳥獣自画

鳥獣自画　目次

鳩一羽　…　四

自業自得の蟹　…　六

賢き馬のために　…　十

鸚鵡の嘴はよく動く　…　十四

憑く狐　…　十八

成れ果ての豚　…二十二

自業自得の蟹

元はと言えば、お前が悪かったんじゃないかと、ひっそりと呟いた。誰にも話しかけられず、省みられず、むしろそれを拒んでいるかのような、その姿に。うつむきがちに丸められている、小さな孤独な背中に。

きりーつ、れーい、と既に呪文化した号令がかけられると、先生は教室を出て行き、がたがたと乱暴にいすが机の下に押し込まれ、教室は秩序なき喧噪に満ちる。ボールを抱えて我先に教室を飛び出ていく連中、自由帳を引っ張り出して机の上に覆い被さり熱心に何かを描き付け始める奴、寄り集まっておしゃべりに興じ始める女子の群れ、消しゴムやら定規やらを複雑な規則に沿って並べたり弾いたりして遊び出す一団。

そして、最近よく見かけるようになった円陣を組む面々。ハンカチ落としかフォークダンスか百物語か、はたまた何かの儀式かというと、どれでもない（強いて言えば、一種の儀式と言えないでもないのかもしれない。だとすれば、相当のブラックジョークだが）。彼らは一人の人影を取り囲んでいる。中心の人物は、どうやら壁際に追いつめられている。すわかごめかごめか、というとそんな牧歌的な情景でもない。その証拠に、今立っているうちの一人が、真ん中の一人の肩をこづいた。既に背後に壁が迫っている相手は、それ以上後ろに行くことができず、ますます壁に押し付けられた形になる。それに続くように次々と、追い詰められた一人に、周りの奴らがプリントやらノートやらを押し付ける。全員の気がとりあえず済むと、それにてこの集まりは解散である。後には腕いっぱいにプリントやらノートやらを抱えた一人が残され、そしていつもこの辺りでチャイムがマイペースに鳴り響き、先生が教室に入ってくる、児童たちが休み時間の雰囲気を引きずりながら席に着く、するとあれもそれも押し付けられっぱなしの彼も着席せざるを得ない、という訳である。

これが、そのときクラスの一部ではやっていた、遊び、であったと俺は回想する。

この遊びのいわゆる被害者、である彼がなぜ一体こんな境遇に陥ってしまったかと言えば話はごく簡単で、まずひとつに、この立場に凋落する以前の彼は、いわゆる優等生というキャラクターだった。ただしこの場合の優等生というのは、先生のおぼえがめでたい、という意味であった、というところがこの話のミソである（だから正確には、彼は先生たちの間では未だに優等生である、と言える、厳密に言えば）。ふたつに、彼で遊んでいる奴らは、いわゆるやんちゃな連中だ（問題児、と言うほどでもない、束になればまた別だが）。さてこの二つの前提を合わせて問題を見るに、後者がやらかした不始末（窓ガラスを割ったとか、おそらくそんなようなこと）を、前者が先生に言いつけたため、それを面白く思わなかった後者の連中が「そんなにいいこなら、俺たちが怒られないように何でもやってくれるんだよな」と絡んだ、という形である。かくて、優等生の彼は連中の宿題を押し付けられるや

ら、掃除当番の身代わりにさせられるやら、その他ほとんど言いがかり的な何やらまで被せかけられることになった訳だ。
なにぶん遠ざかってしまった記憶であるのと、それからその当時はそう物事を論理的に考えていたわけではないから、これは今現在の俺の頭の中で再構成した状況といきさつではあるのだが、まあ、実際の筋書きの大部分はほとんど間違っていなかったと思う。
俺は参加せずに遠巻きにしていただけだが、優等生の彼がかわいそう、と思うこともなく、連中の言い分は正当だなとさえ思っていたように思う。自業自得、とまでは言わないけれども、種をまいたのは自分自身なのだから、仕方がないなくらいは思っていた。連中の悪事など放っておいても露見するのだし、現にそのときそうなっていたように余計なことをすると、連中のこどもっぽさから言ってしつこく絡まれるのは確実だったのだし、優等生ぶりを暴発させた彼が悪いのだ。
なぜか、当時の幼い俺の脳裏には、絵本で見た「さるかにがっせん」が再生されていた。サルにいじめられたカニはかわいそう、と俺にはとても思えなかったのだ。柿をぶつけられた親ガニは気の毒だが、元はと言えば柿の種を脅して成長させて、柿を独り占めしようと思ったのだから、その心根が悪かったと言われれば仕方ない、と幼心に思ったのと、優等生の彼とそれをいじめる連中が、だぶって見えていた。
そのせいかどうかは知らないが、彼はカニになってしまった。思えば、ヒトが動物になるのを意識的に受け止めたのは、この出来事が最初だった。
その日も、彼は連中が蹴飛ばして倒したゴミ箱からぶちまけられたゴミを、休み時間中掃除させられていた。奴らは室内鬼ごっこと称してさっきまで走り回っていたくせに、彼がしゃがみ込んで掃除をし始めると、足を止めて彼の近くに集まり、ゴミを蹴散らしたり、わざわざ消しゴムをこすって消しクズを増やしてみたり、「いいこちゃんは今日もいいこぶりっこ」などとはやしたてたり、したい放題だった。日に日に激化する連中のいじめを、クラスメイトたちは物珍しそうに眺めるところから始め、この頃には多くがいじめの状況に慣れ不干渉を決め込み、調子に乗った奴などは便乗して彼に面倒事を押し付けたりしていた。
味方が誰もいない状況に、ついに我慢の限界に達したのか、彼は床にしゃがみ込んだまましくしくと泣き出した。そのひっそりと泣く姿が、また惨めで、連中はげらげら笑い、挙げ句の果てには片付け切れていないまま床に散らばっているゴミを、その哀れな小さな背中に投げ付け出した。それを見ていた準やんちゃな奴らがはやしたててあおり、女子たちはひそひそ声で連中を非難し（しかし先生に言い付けたりはしない、厄介事に巻き込まれるのは御免だし、ひそひそ言う話題が欲しいだけで実はそれほど深刻にとらえちゃいない）、無責任な奴らは必死に見て見ぬ振りを決め込みながらも、しかし目は釘付けで、教室の中は妙な興奮に包まれ、一種の狂乱状

態にあった。
　このまま騒いでいれば先生に見つかり、クラスまとめて怒られて、その上いじめも露見し、結果雰囲気ばかりが重苦しいそれでいて話は堂々巡りのうんざりするクラス会議が開かれるのを察して、彼を中心に渦巻く興奮の輪から外れて、トイレに向かった。一通りの小言が済んだ辺りに帰ってくればいい。
　廊下に出てしまうと、彼の泣き声は聞こえず、ただ周りが騒ぐ声ばかりが残った。

　しばらく時間を潰して、休み時間が終わる辺りに帰ってくると、俺はクラスの異常に気付いた。この場合の異常とは、彼をいじめるボルテージが上がりすぎた異様な雰囲気でもなく、深刻な顔をした先生が控える沈鬱な雰囲気でもなく、いつも通りの休み時間の光景が教室にあったことである。連中でさえ、何事もなかったかのように、室内鬼ごっこの続きか走り回っている。ゴミ箱は倒れて、中身のゴミが散乱したままになっていた。ただ、そこに彼はいなかった。
　平静を装いながら、俺はゴミ箱に近付いていく。その光景は、彼がいじめ始められる以前の、連中がはしゃぎすぎてゴミ箱を蹴倒し、顔を見合わせて放置することに決め、先生にそれがばれて怒られ、後始末させられる、というおなじみの流れを思い出させた。そこに、小さな背中を丸めて、後始末を押し付けられている彼の姿は、ない。

　そのとき、散らばったゴミの一角が、かさりと動いた。俺は目を凝らした。紙クズがごちゃごちゃしたものの間から、灰色の床材の上を這って姿を現したのは、一匹の小さなカニだった。かさかさと、思わぬ素早さでカニは床を進み、物陰に紛れ見えなくなってしまった。
　幼い俺は、ああ、彼は本当にカニになってしまった、と何の抵抗もなく受け入れた記憶がある。
　そして休み時間終了の鐘が鳴り、先生が休み時間の余韻にざわつく教室に入ってきて、倒れたゴミ箱を見、連中に片付けるように命令した。それにしぶしぶ返事をして、連中はゴミ箱を起こし、その中にゴミを放り入れだした。　先生は、彼については何も言わなかった。
　俺は、回想をここで終える。

賢き馬のために

二階からの鳴りやまぬ、大きな音に思わず舌打ちをする。天井が震えるほどの大きな低音が腹の下のほうへと伝わり不快感が深まる。高音は頭蓋骨を直接震わし、頭痛となっていく。思わず、床を強く蹴ってしまう。

自分は音楽というものが好きではない。そして音楽に興じる奴らを見るのも、好きではない。低音が響き渡る音楽に頭を振りながら外れたリズムを取ろうとしたり、頭が割れんばかりの高音に奇声をあげて答えたり、音楽を聴くことに熱中する連中は見ていて、寒気がする。しかし、それよりも自分は音楽を奏でる連中が好きにはなれない。

物心がついたか、つからないかのころだった。部屋の中で絵本を読んだり、玩具で遊んでいたりと静かに過ごしていると、突然、張りつめた糸を引っ掻いたような音が盛大に聞こえた。いったい何事かと、幼く小さかった俺は天井を見つめたが、天井には音が鳴るようなものはなかった。俺は音の正体を探し出し、止めようと部屋の中を探し回った。一所懸命にいくら探そうとも音の正体は見つからず、そして探している間、ずっとそのキィーキィーとした、耳障りな音は自分の部屋の中で鳴り響いた。俺は歯ぎしりの音で頭をいっぱいにし、両手で耳を塞いで、その雑音を頭の中から追い払った。結構な時間が過ぎ、そっと両手を耳から外すといつの間にか雑音は鳴りやんでいた。

しかしながら、それからというもの、昼過ぎになると毎日のように、糸を引っ掻いたような意味のない雑音が天井よりも上のほうから鳴り響いていた。そして、とうとう、幼い俺が母親にその音のことを伝えると、母親は少しだけ不思議そうな顔をして、それから合点がいったような顔をして、俺に音の正体のことを教えてくれた。彼女が言うのは、その音の正体はヴァイオリンと呼ばれる楽器のものであり、俺と同世代の上の階に住む女の子が、最近その楽器を習い始めたというのだった。彼女は言い終えると、あなたも何か楽器でも習ってみると尋ねてきたが、俺は興味なさそうに首を振った。

それからも、昼ごろになると、天井からのヴァイオリンの音は鳴り止まなかった。その雑音を聞きたくなかった俺は昼ごろには外に出かけるようにした。しかしながら、雨の日には自分は外に出ることは出来ず、仕方がなく部屋の中で、その音を聞いていた。最初のうちは、キィーキィーというだけの意味のない音の連続だったが、しばらくすると張り詰めた糸を引っ掻いたような音から少しだけ色のついたような音になっていた。そのうち、音の連続は意味を成すようになり、簡単な音楽のようになっていた。母親はそれを聞いて、頑張って練習していると言うが、自分にとっては相変わらず雑音にすぎなかった。しかし、昼ごろまで家にいるような生活を終えて、学校に通い始めると、その不愉快な雑音のこともすっかり忘れていた。

ある日の放課後、廊下の掃除をしていると、近くの教室から、あの耳障りな音が聞こえてきた。教室の名前を見ると、

音楽室と書かれていた。廊下の端に持っていた箒を持たれかけさせ、少しずつ教室へと近づいていく。一歩ずつ進んでいくと、音が大きくなり、そして耳の中へと、入っていく。以前部屋の中に零れ落ちていたときより、音は鮮明だった。もう一歩、足を前に進めて、扉へと近づく、音は楽しげに、複雑に絡み合い、曲となっていた。そして、最後の一歩を進めて、扉を開けて、中を見る。

教室の中には少女が一人立っていた。ヴァイオリンの弓を大きく引くたびに、一房にまとめた長い髪が軽く揺れていた。しばらく、扉を開けたまま、彼女のほうを見ていると、こちらに気づいたようでヴァイオリンに弓を当てるのを止め、こちらに向かって歩いてきた。

「すいません、何か用ですか。」

ヴァイオリンと弓をピアノの上に置き、彼女は尋ねる。俺はここを掃除することを伝える。

「まだ、練習しなきゃならないですけど。」

彼女は譜面立てに置かれた、楽譜を捲りながら、そう言う。俺は仕方なく、掃除が終わったらすぐに戻ってくればと返す。彼女はちゃんと伝えてくださいね、と念を押し、音楽室から出て行った。

音楽室の床に敷かれたカーペットに掃除機をかけ、ゴミ箱の中身を見ると、あまり溜まっていなかったようなので、放置する。他に掃除をしなくてはいけない場所はなかったか、教室の中を見渡す。すると、彼女は練習していた楽譜とヴァイオリン、そして弓が置かれていた。近づいて、弓の糸を弾いてみる。ピンと張られた糸を爪で少しだけ持ち上げ、そして離すと、少しだけ音がした。弦に張られた糸のうち、一本を同じように軽く弾くと、音が反響して、先ほどよりも響いたような音がした。そして、彼女が持っていたように弦と弓の張り詰めた糸と糸を擦り合わせると、今度は軋んだ不快な音が響いた。それだけでしかない道具なのか、そう思って、俺は教室を後にした。

学年が進む中で、ヴァイオリンの彼女と同じクラスになることもあった。彼女は明朗快活で、勉強にせよ、スポーツにせよ得意だったらしく、どんな科目でも目立った活躍を見せていた。しかし、音楽の授業においては、より彼女に耳目が集まることが多かった。特に幼いころから練習していたヴァイオリンの腕前は年齢相応以上で、他のクラスメイトからも、さらには音楽教師からも賞賛の言葉を投げかけられていた。あるときの音楽の授業で、彼女がヴァイオリンの腕前を披露する機会が与えられた。音楽の授業など興味もないクラスメイトたちも、クラスの中で目立つ彼女が特技を披露するということに色めき立ち、彼女がヴァイオリンを持ってクラスメイトたちの目の前に立つと、皆普段よりも息を潜め、静かにした。

彼女が弦と弓の糸を擦り合わせ、音を鳴らす。自分が音楽

室で鳴らしたよりときよりも、綺麗に纏まった音がヴァイオリンから響き渡り、何やら知らぬ曲が作られていった。しかし、いくら彼女の音が纏まろうとも、音が重なり合って曲として鳴ろうとも、自分にはそれが綺麗には聞こえず、昔のように不愉快なままだった。だが、周囲の皆は彼女のヴァイオリンを弾く様に見入ったり、その曲に聞き入ったりしていた。そんな彼らが猿になったり、鼠になったりする様子を見ている内に彼女の演奏が終わっていた。盛大な拍手を皆がする中、俺はいつの間にか顔を落とし、耳を塞いでいた。拍手が鳴り止み、俺が顔を上げ、耳から手を離すと、彼女は何度目かのお辞儀の途中であり、周囲に愛想笑いを振りまいていた。そして機械的に俺のほうにも愛想笑いを振りまいていた。その後、彼女とはクラスも別々となり、そして学校も異なり、接点はなくなった。母親から聞いた噂話によると音楽を勉強するために海外に留学に行ってしまったという。

一度床を蹴ったが、その後も上の階からの大きな音は鳴り止まなかった。テレビの電源をつけ、音量を最大にしようとして、リモコンを操作すると、チャンネルが切り替わった。切り替わった番組には、その彼女が映っていた。相変わらず、長い髪の毛を一房にまとめ、丁度演奏が終わったあとなのだろうか。盛大な拍手に対して、何度も何度もお辞儀をしていた。拍手は一度鳴り止んだあと、彼女が下がろうとすると、再び起き、その度に彼女は何度も何度もお辞儀をしていた。ポニーテールの髪の毛はその度に大きく揺れていた。俺が彼女の姿を凝視して、上の階からの音から気を紛らわそうとしていると、何度もお辞儀をしている彼女の首は太く、そして長く伸びていき、彼女の皮膚の色は褐色色となっていた。拍手に対して、テレビの中央に映っている馬は、何度も何度も前足の蹄を高く上げて、床を鳴らし続けていた。

鳥獣自画

発行　2011 年 6 月 12 日

作成　独蛙…http://deform.y7.net/lonelyflog/index.htm

井中蛙

…鳩一羽，賢き馬のために，成れ果ての豚

…http://runoverkawazu.web.fc2.com/

津和野ヒトリ

…自業自得の蟹，鸚鵡の嘴はよく動く，憑く狐

…http://deform.y7.net/

装丁　井中蛙

印刷　ポプルス